

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 27 年 6 月 25 日現在

機関番号：34505

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2012～2014

課題番号：24531083

研究課題名(和文)復興過程における「学校」の役割 教育コミュニティと社会関係資本に着目して

研究課題名(英文)A role of schools in the area under reconstruction after disasters: From the viewpoints of educational community and social capital.

研究代表者

鈴木 勇 (Suzuki, Isamu)

甲子園大学・人間科学系・講師

研究者番号：90452383

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,000,000円

研究成果の概要(和文)：東日本大震災で被害を受けた学校について調査を行った。ある小学校避難所の設立から閉鎖までを4期に分けて整理した。そこからわかったことは、学校には子どもを育て、教育するという本来の機能と、地域の社会関係資本の結節点として地域を育てる機能があるということである。災害時や復興期には特に、前者だけではなく後者の機能が求められる。それを可能にするためには、それぞれを担う学校教職員と地域リーダーが必要である。

研究成果の概要(英文)：I studied the schools damaged after the Great East Japan Earthquake 2011, and examined 4 phases of one primary school shelter. I found out that schools have 2 functions, the first one is to educate children, and the second is to become a hub of social capitals in communities and to educate the communities. Especially during the time of disaster recovery and reconstruction, not only the former but also the latter is needed. In order to do that, the teachers and other staff of schools, and community leaders who take on the responsibilities of each functions of schools are required.

研究分野：社会心理学

キーワード：災害

1. 研究開始当初の背景

平成23年3月11日に発生した東日本大震災は、教育関係者や教育施設にも甚大な被害をもたらした。過酷な状況の中、震災直後から、被災地の学校は様々な役割を果たしてきた。体育館や空きスペースは避難所や物資倉庫となり、校舎前ではボランティアの受付が行われた。避難所の閉鎖後も、多くの学校の校庭には仮設住宅が建設された。新学期の授業開始は遅れ、教職員はその間、本来の日常業務とは異なる慣れない仕事に翻弄された。

本来の学校の役割は、当然ながら、子ども達の教育にある。平常時には、学校、家庭、地域が協力しながらも、それぞれの役割を尊重し、ある程度の線引きがなされている。しかし、震災発生後、学校に求められた役割は平常時のそれとは異なるものであった。学校が扱う対象は児童・生徒から、保護者、地域の人々へと拡大し、その機能的役割も狭義の教育のみに留まらず、コミュニティの拠点としての役割が求められた。このように地域における学校の役割は、災害を境にして、平常時のそれからは変容し、学校は、今後の復興過程においてもさらに重要な役割を果たしうるし、果たすべきだと考えている。

2. 研究の目的

本研究は、東日本大震災の復興過程において、「学校」が果たしうる役割について検討することを目的としている。なお、タイトルの「学校」にカギ括弧をつけているのは、学校を単なる教育施設としてではなく、学校を拠点として行き交う、ひと、もの、かね、情報を含む広い意味でとらえるためである。

筆者は、阪神大震災を契機として、いくつかの災害復興を視野に入れた災害研究を実施してきた。また、近年は、学力問題を中心に、学校と地域の関係、あるいは、人々とのつながりが子ども達の学びにどのような影響を与えるかについて検討してきた。

これらの研究知見から、被災地の復興過程における学校の役割を考える上で、2つの視点が重要であると考えた。第1に、教育コミュニティに関する一連の研究知見である。高田(2007)は教育コミュニティを、「子どもの日常生活圏域としての地域を基盤として、そこに住む地域の人びと、子どもの保護者、学校の教職員や社会教育研究者などが、教育に関わる活動を通して有機的に結びついている共同体(コミュニティ)のことである」と定義している。そうであるならば、学校を中心とした教育コミュニティとしての地域の結びつきが復興過程に果たす役割を検討する必要があるだろう。

第2に、社会関係資本に関する一連の研究知見である。災害を経験したことによって、被災地には災害前とは異なる人々とのつながりが生まれていると考えられる。それは、例えばボランティアに代表されるように外部から入ってくる人々との新たなつながり

あり、あるいは、災害前には交流のなかった人々との新たな交流である。もちろん、震災前からの地域の間人関係が災害時に力を発揮する事例も多くあるだろう。こうした新旧の人々とのつながりを考える際に、パットナム(2006)が指摘する「橋渡し型」の社会関係資本と「結束型」の社会関係資本に関する論考は示唆を与えるものであろう。

3. 研究の方法

本研究では、被災地域におけるフィールドワーク調査に重点を置いた。具体的には、宮城県南三陸町の小中学校や教育委員会、岩手県野田村の小中学校や教育委員会、また、宮城県気仙沼市の教育委員会、仙台市の教育委員会などにおいてフィールドワーク調査、聞き取り調査を実施した。また、南三陸町A小学校の避難所自治会にかかわった人々の聞き取り調査を実施し、小学校避難所の設立から閉鎖までを整理した。以下、各年度の調査概要である。

24年度は宮城県の仙台市、名取市、南三陸町、そして岩手県野田村の役場、教育委員会等関係部署を訪問し、東日本大震災における教育と学校の被害状況と復興状況についての聞き取り調査を実施し、資料収集を行った。また、南三陸町と野田村の小中学校においてフィールドワークと聞き取り調査を実施した。

地震発生後の緊急救急期や避難時期において、平時より学校と保護者そして地域の人々との結びつきが強い地域では、避難所運営や救援物資のコーディネートがスムーズに進んだ事例が多く、今後は学校を中心として、結びつきが強い地域を作っていくとすべき動きが広がっていることを知ることができた。

また、野田村においては被災地外の人々との新たな結びつきが地域に変化をもたらした。震災直後より関西のボランティア団体が野田村を拠点として活動を続けてきた。現在も地域事務所を構えて活動を継続し、ここが野田村と関西を結ぶハブの機能を果たしている。被災地と被災地外が結びつくことで、被災地は被災地前の姿に戻るだけでなく、被災前とは異なる新たな形への復興を目指していることを検討した。

さらに津波の被害により従来の校舎を使うことのできない南三陸町の小学校では、教職員や保護者、地域の人々が学校再開に向けて活動している様子を参与観察した。彼らへの聞き取り調査から、学校が物理的にもそして精神的にも地域コミュニティの結節点であり、復興のシンボルとなっていることを確認した。

25年度は、宮城県南三陸町や岩手県野田村において聞き取り調査とフィールドワークを実施した。2011年3月、地震と津波によって卒業式を実施できなかった(あるいは大幅に遅れて実施された)当時の小学6年生は本

年度をもって中学校を卒業した。同じく当時の中学3年生は高等学校を卒業した。このように震災から時が経過する中で、震災によって使用できなくなっていたB小学校はほぼ同じ場所で学校を再開した。また、別の小学校は住民の高台移転に伴い、高台での学校再開が計画されている。こうしたそれぞれの学校の復興は、地域の復興状況と相互に影響しあいながら進んでいることがフィールド調査から明らかになった。

また、A小学校では震災当時の避難所の動きを記録として残すための動きが始まっている。当時、避難所の運営を担った地域のリーダー的存在の人たちへの聞き取り調査を実施し、貴重な資料を収集した。

26年度は、地震発生時に避難所となった南三陸町のA小学校に焦点を当て、関係者へのインタビューや収集資料を基に、その避難所の成立から閉鎖までの足跡をたどり、避難所の果たした役割を検討した。地震発生時、南三陸町には複数の避難所が設立されたが、その中でA小学校避難所には自治会が組織され、行政や学校と連携しながらも避難者自身による自主的な運営がなされた。こうした運営を可能にしたものは何だったのか。そして、避難所の運営はどのようなものであったのか。A小学校避難所自治会の会長、副会長など中心となって避難所を運営した人たちや避難者にインタビュー調査を実施した。

インタビューデータや資料収集から明らかになったのは、避難所の成立から閉鎖までにはいくつかのフェーズがあり、そのフェーズごとに組織の構造や避難所と外部組織との関係などに変化が生じていたことである。そして、避難所自治会で培われた人間関係が、避難所が閉鎖した後も、被災地復興の中心となっているということであった。

4. 研究成果

(1) A小学校避難所のエスノグラフィー

南三陸町のA小学校避難所では、震災4日目に避難所自治会を発足させ、以後、様々なルール作りや、ノロウイルスをはじめとする衛生対策、避難所となっている体育館での卒業式の実施などを行ってきた。関係者へのインタビュー調査やメモ類などの資料から、その設立から閉鎖までを時系列に整理した。

第1期：被災直後 3月11日から3月13日

南三陸町はこれまで幾度かの地震で津波被害を経験しており、危機意識も高かったので、地震当日には指定避難場所である高台の公園に多くの人々が避難した。しかし、想定以上に波が高かったため、人々はさらに高い場所にあるA小学校に移動し、体育館が避難所となった。A小学校は1960年のチリ地震で被害を受けた後高台に移転されているためかなり高い場所に位置する。震災発生後2日目には他の高い建物の中で一夜を明かした町

の人たちもA小学校避難所に集まってきた。3日目には避難所に物資や非常食が届けられたがその受け渡しが混乱したため、班や班長が組織された。避難している人たちの間にも避難生活が長くなるだろうという思いが広がっていた。

避難してから冷静になると「これは長期戦だな」って気がついた。(中略)ここは長期戦の準備をしておかなければいけないと。自衛隊が来るまでは自分たちでなにかしなくてはならないと話していた。ルールを作らなくちゃいけないと。(自治会スタッフ)

第2期：自治会の結成 3月14日から3月19日

3月14日に自治会が発足した。避難所設立当初は役場職員が指揮をとっていたが、町役場の被害も甚大であり、役場職員が避難所に常駐することは不可能なため避難所での自治が求められた。ここにおいて、A小学校避難所では「避難所自治会」「行政職員」「学校関係者」の3つのグループが明確化したことになる。自治会は毎日の定例会議を実施し、避難所のルール作りや衛生管理、物資配給やマスク対応など様々な問題に対応していた。

別の避難所に(災害対策)本部ができて、町役場職員が(A小学校避難所から)どんどん出ていったんですね。そして対応が難しくなったので、地域の人たちでやってもらわなくちゃいけないということになって。最初避難所にもたくさん役場の職員がいたんですね。どんどん引き抜かれていって。頼れる人がいなくなっていくんですね。(避難者)

避難所自治会ができたことで学校の教職員が避難所運営を担うことができなくなり、教職員は学校の復旧にあたることができた。しかし、それは「避難所」と「学校」を分かつことでもあり、少なからず両者の衝突も発生した。

学校の先生には学校の組織がある。(中略)学校には学校のルールがあるからそれを崩せない。なので、学校の先生には「先生は学校のことをしてください」とお願いした。校舎に避難している子どもたちがいましたから。(自治会スタッフ)

例えば校舎の廊下に荷物を置く、置かないでもずいぶんもめたりした。教室を使わせてくださいというのも、(学校側と)ずいぶん交渉したもんね。(自治会スタッフ)

第3期：安定期 3月20日から4月10日

この時期になると自治会における役割分担が明確化した。例えば、会長、副会長のもと、医療、配膳、衛生、施設、自警などの担当が決められた。また、小学校避難所に集まる物資に余剰が出るようになり、自治会はこ

うした物資をより必要とされている他の場所へ再配分する役割も担うようになる。

このように避難所運営が比較的スムーズに進んだ背景には、避難所自治会スタッフのほとんどがお互いに顔見知りであったことがある。彼らは、頼るマニュアルのない状況で、何事も話し合いながら、目の前にある問題に対する方針を決定していった。

(自治会のメンバーは)知り合いと、知り合いの知り合いみたいな。直接話をしていなくても、知っている人ばかりだった。一人を除いては。(自治会スタッフ)

避難所を作るためのマニュアルとかは、後から来ました。当時は何もなかったんですよ。わかってることは、ここからしばらくは出られないということ。そして、商売もできないということだけ。(自治会スタッフ)

そんな中、大きなイベントとしてまだ行われていなかった小学校の卒業式が、28日に避難所として使われていた体育館で行われた。避難者が大掃除をして卒業生を迎えたこの式は「記憶に残る感動的な卒業式」(自治会スタッフ)となった。

卒業式は県内で一番遅かったんだよね。で、避難所にはテレビがあって他の避難所の卒業式を見られた。多くの避難所では避難者がそのまま、卒業生が名前を呼ばれて避難者の間をぬって卒業証書を受け取りに行くんだよね。それがどうもかわいそうだなって話になって、我々は一生に一度の卒業式だから通常の卒業式にしてあげたいと。それで全部片づけてしまおうとなったんです。でも、そう決めただけ片付くなんて思ってなかったけど、(避難所の)みんなに俺たちの手でやってやるべっていう雰囲気があったんだ。(自治会スタッフ)

なんつうかねえ、劇的っていうとあれですけれど、(避難者がいる中で実施されるという)普通ではありえない卒業式なんですけど、温かみがあって、特別な空間だったかなあとと思いますよね。(A小学校教員)

第4期:避難所の解散まで 4月11日から5月8日

転出者が多く出たこともあり避難者数は300人を割り込み、22日に避難所の解散が報告された。まだ帰り場所のない避難者は中学校避難所やホテルなどに移動し、5月8日A小学校避難所は閉鎖された。

避難所が設置されていた間、物資やボランティアなど様々な支援の手が差し伸べられた。インタビューした避難所の関係者は、そのことに心から感謝しながらも、支援に頼りすぎることなく自分たちの力で自立していくことの大切さをこの時期を振り返りながら語った。

地域と生きることって、自立ってことで

もあるんだよね。地域が生きることって助けられるばかりじゃなくて自立していくことでもありますからね。支援いただくことと自分たちで自立することの関係はとも難しい。(自治会スタッフ)

こうして避難所は閉鎖され、避難所自治体は解散した。しかし、この自治会を組織し避難所を運営してきた中心メンバーは、今でも地域の復興活動の中心にいる。震災以前から知り合いの人も、顔は知っているが話したことがなかった人も、震災を機に他地域から入ってきた人も、様々な人々が避難所自治会を通じて知り合い、今では地域の復興に向けて活動を共にしている。

(2)「狭義の学校」と「広義の学校」

上記のA小学校が災害時に果たした役割は、本来の学校の役割とは大きく異なる。本来の学校の姿を「狭義の学校」とするならば、「狭義の学校」とは、子どもたちを育てる教育の場であり、子どもたちの成長の場である。物理的には学校施設を有し、そこに児童・生徒、教職員、保護者など学校関係者が集い、予算が割り当てられ、情報を共有する。

これに対し、災害時にみられるような学校の姿を「広義の学校」とするならば、「広義の学校」とは、地域を育てる実践の場であり、地域の成長の場である。物理的には、必ずしも学校施設のみに限定されず、児童・生徒、教職員、保護者以外の地域の人々も含めて、地域のひと・もの・かね・情報の結節点として機能する場である。

震災直後の学校は、体育館が避難所となり校舎にも物資があふれ、授業どころではなかった。その後も様々なイベントが学校で行われ、本来の業務になかなか戻れないという学校教職員の声をよく聞いた。もちろん、災害時においても、可能な限り、子どもの教育の場としての学校の機能、いくなれば「狭義の学校」を最優先すべきである。しかし、地域全体の復興を視野に入れた場合、学校は「広義の学校」としての機能を果たすべきでもある。そのためには、学校が地域の社会関係資本の結節点としての役割を果たすことが必要となる。A小学校避難所はその役割を果たし、その結びつきは避難所閉鎖後も地域の復興をけん引している。

学校が「狭義の学校」の機能をおろそかにすることなく、「広義の学校」の機能をも果たすことはたやすいことではない。多くの場合、それは学校の教職員への負担を大きくしてしまうからだ。「広義の学校」の実現には、おそらくは、教職員以外のコーディネーターが不可欠となる。そして、教職員が担う「狭義の学校」と地域リーダーが担う「広義の学校」が共存することが理想的な形なのではないだろうか。A小学校避難所では学校の教職員は子どもの教育に専念し、自治会と協力関係を築き、両者の共存がめざされていた。

先生方は「とにかく子どもたちのところ
に出向いて、(校舎がまだ使えないので)
青空教室を開く。これが俺らの本分だ」と。
教師として子どもたちに勉強を教えたい
という熱意があった。(A小学校教員)

避難所運営が大変だということ
は重々承知していたのでね。なんとか向こう
のひとたちに迷惑がかからないように、共
存できるように、お世話させていただく
ということですね。(A小学校教員)

学校はその地域の象徴であり、地域をあら
わす鏡でもある。津波の被害を受けながらも
同じ場所での再開を決めたB小学校関係者の
「学校がなくなれば地域がバラバラになる
と思った」という言葉にはそのことがよく表
れている。A小学校の事例からは、その学校
で地域の社会関係資本が結びつき、試行錯誤
しながら地域の復興をけん引している姿が
見て取れた。

復興に正解はないですし、到達点もない
と思うんです。地域ごとに復興のありかた
も違うと思うんですね。(中略)それをみ
んなで探り合って、話し合いながら進んで
いく。とにかく人間は一人では生きていけ
ないのですから。この避難所で助け合うこ
とを通じて、みなさんとこうして話し合う
ことができる。私たちは一人では生きてい
けないことをこの震災で学んだんですね。
これを忘れてはいけません。(自治会スタッ
フ)

引用文献

パットナム R. D. 2006 孤独なボウリング
柏書房
高田一宏 2007 コミュニティ教育学への
招待 解放出版社

5. 主な発表論文等

〔その他〕

報告書 志津川小学校避難所記録保存プロ
ジェクト中間報告書

6. 研究組織

(1) 研究代表者

鈴木 勇 (SUZUKI, Isamu)
甲子園大学・心理学部・講師
研究者番号: 90452383